

---

# IS 二人の天使

ラウラ&シャル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 二人の天使

### 【Nコード】

N9577Y

### 【作者名】

ラウラ&シャル

### 【あらすじ】

気付いたら真っ白の世界にいた少年。不意に自分が死んだことを通告される…

## ここ何処？（前書き）

調子こいた作者の妄想です

「どこ何処？」

僕の名前は月詠翠。今、目の前は白一色の世界が広がっている…上  
下左右何処を見ても白一色、不意に誰かの視線を感じて後ろを向く  
と…。土下座をしている羽の生えた水色で長髪の人がいた。「ごめ  
んね」

今の状況に理解ができない僕に掛けられた初めの一言だった…

「えっと…状況が理解できないので取り敢えず顔を上げてください  
…」

僕の一言に恐る恐る顔を上げる、この時初めて僕の前にいる人が女  
の人だってわかった…

（あれ？どっかで見たような感じが？確かなんかの科学者が製作者  
だったような…）

「私の名前はダイタロスといます」

（ダイタロス…確かそらのおとしものでイカロス達の製作者だった  
気が…）

「はい。その製作者です」

（本物だ。あれ？てか僕まだ一言もしゃべっていないよな？）

「一応、私も神様なので人が考えていること、思っていることは分  
かりますよ」

前髪で顔はよく見えないが口元が笑っている

「あの、それでダイタロスさんは僕に何の用ですか？」

「……………」

一瞬にして空気が重くなった…

「えっと…ごめんなさい。私のせいであなを死なせてしまった。」

彼女の一言に僕は耳を疑った…

（僕が死んでるって？そんな訳ないよ…あ、これは夢だ！そうに違えない！きつとそうだ！）

僕が自問自答していると

「あの…覚えていないですか？」

少し戸惑いながらも心配そうに僕に訪ねてくるダイタロス…

「覚えてないです」

そう答えるしかなかった

「それじゃ…少しあなたの記憶を見させてもらいますね」

そういい、彼女は僕の額に指を当てた…

パアアアア…

一瞬光に包まれる僕とダイタロス…光が収まると、そこには僕がいた…

「…あれは僕?…」

ここ何処？（後書き）

指摘などありましたらお願いします

深層は？（前書き）

原作介入はもう少し後になるから

深層は？

「そう、あなたは死ぬ前の記憶がないみたいだから、私があるの記憶に介入してみているのよ…忘れてしまった深層をね」

何処となく悲しそうに語るダイアロス…

「確か僕は漫画を買った帰りに…帰りに…」

思い出そうとする翠。

映像は進み一匹の猫と登場する…

「あの猫は確か…」

「そう、あれは私…貴方によく世話をしてもらっていた私」

猫が不意に道路に飛び出すと一台の車が。

「危ない！」

僕はとっさに思ったことが口に出てしまった。そして僕は、ひかれて死んだ…

「これが深層よ。思い出した？」

「はい…思い出しました。それで僕は天国ですか？地獄ですか？」

ダイアロスに問う

「いいえ、元はといえば私の責任なんで転生してもらいます」

転生；それは生まれ変わる事なり…

「どんな世界ですか？」

「ISの世界に言ってもらいます」

ISか；作者の苦勞が目に浮かぶな…

「何か別のこと考えてない？」

「気のせいですよ？」

こんな感じのやり取りが続き、一時間後…

「設定は、前世の記憶は残しておきますね。あと、専用機は私が作つておくからね。泥船に乗った感じで安心しなさい！」

嫌々、沈むからね？

「それじゃ、行ってらっしゃい」

え？行き成り足元が開き落下を始める…

「理不尽だあああああ！」

「ふう、行ったわね。深層を伝えるか；まさか娘を桜井君の所に落とした際の柱の残骸あたって死んだなんて言えないわよね…」

微笑を浮かべるダイタロスであった…

「あの…」

不意に声を掛けられて振り向くダイタロス…

「ああ、忘れてたわね。あの子、翠君のこと宜しくね？」

「はい…了解しました」

「了解しました」

二人の女の子がいたとか…

あれから五年後…

え？何で飛んだかって？だって赤ん坊の話とか黒歴史すぎるでしょ？

僕の家系を確認すると父、母共に死去。親戚なし。寂しい家庭だなあ。なんて思っていると近くに通帳発見！金額は…と…

「な、何じゃこりゃあ」

そこには見たことない金額があった少なくとも0が10個以上は並んでいる…

暫く家の中を探検していると、押し入れに目が行く…恐る恐る開けてみるとそこには…

「イカロス？でも何で？」

イカロスというのは蠟で固めた羽でとんだ人ではなく、そらおとで愛玩用エンジエロイドとして主人公のどこに来たUMAである…でも何かがおかしい…そう、イカロスと違うところは、二つある

1・何故か二人いること

2・髪の色と羽の色がピンクではなく白と黒だということ

疑問が頭の中を支配する…

「おはようございます。my master」

「おはようございます。my master」

二人のイカロスが目を覚ました…

「あの…」

白いイカロスが心配そうに見る

「大丈夫ですか？マスター」

続けて黒いイカロスも見ている…

「マスターが私たちに気が付いたらこれを見せるようにって言われました」

封筒を渡される

(差出人は無しか…多分ダイタロスだな…)

翠君へ

この手紙を見ているということは私はもうこの世界にはいないですよ…。

「恋人か!?!」

文章を読んでいて思わず突っ込んでしまった翠であった…

手紙を破ろうとしたが続きを読むことにした

今の年月は白騎士事件が起こった後なんだよね。

多分一夏君は高校3年位だと思っよ!…

(え?俺年下になるの?)

ちなみに容態だけが一夏君がISを動かした時に合わせて一気に成長するようにしてあるから安心してね?

(初めからしろよ…)

だって、この年じゃないと女湯に入れないでしょ?

「入りたくないわ!」

また突っ込んでしまった翠…

本題に移るけど、先ず初めに私の娘二人を未永く宜しくお願いね!

あと、IS機能は彼女たちから聞いてね？彼女たちの性能は 型と一緒に使い方によっては馬鹿が作ったゼウス、もしくはシナプスも7日壊滅に追い込むことができるのであしからず…

(え？ゼウス破壊できるの？)

この子達は感情の機能を増やしたので恋もするしお洒落もするからね。

あ、でも、金銭面は安心してね？

最後に娘たちをお願いね！

PS・名前は貴方が考えてあげてね

(ポケと真面目な分が混ざって読むだけで疲れたな…)

「あの…」

「ご命令はありますか？」

二人のイカロスが聞いてきた…

「その前に言っておく、マスターじゃなくて翠でいいよ」

「解りました。翠」

「了解しました。翠」

あとは名前だな…

(……………！！)

「鯉…じゃなくて、ひらめいた！」

そっぴい二人のほうを向く

「白いいカロスをおブ、黒いいカロスをおメランにしよつと思つんだ  
けどどうかな？」

(ここで二人に拒まれたらどうしようかな…)

なんてなことを考えていた…

「おブ…それが私の名前ですか…」

「メラン…それが私の名前…」

少し考える二人…

「良いと思ひます！」

「良いと思つ！」

もらった名前に喜ぶ二人だった…

深層は？（後書き）

感想待ってます

誕生の理由（前書き）

更新遅れました

期末と教習所のせいです

## 誕生の理由

イカロス達改め、イブとメランの名前の考え終わりその日は眠るに落ちた…

ん？…ふと気が付くとそこは見覚えがある風景…果てしなく白くて果てしなく広い世界、そう僕は知っているこの世界を…

「あら、来てくれたのね？」

声ができるほうに向くと

「？」

ダイタロスがいた

翠「どうしてまたここに呼んだんですか？」

ダ「特に用事はないんだけどね、素敵な名前をありがとうね」

純粹に事を喜んでいる笑みがそこにはあった。前髪で目は見えないが、口元は笑っていた。

翠「聞きたかったんですが、どうしてイカ…イブとメランの二人をよこしたんですか？」

不意に思ったことを聞いた

ダ「そうね…まずはイブの方は単純に私からの細やかなプレゼント

でも思ってくれればいいわよ?。」

翠「それは、ありがとうございます」

ダ「いいのよ。元はといえば私の不手際だったんだから」

翠「それで、メランのほうはどうしてなんですか?」

ダ「……………」

さつきとは違い雰囲気が重くなる

ダ「貴方には知る権利があるけど、これを知ってあなたはあの子…  
メランを軽蔑しないでほしいの…」

翠「……………」

重い雰囲気につい黙ってしまふ。

ダ「実はね……………」

メランはイカロスと桜井君を                    為に作られた子なのよ」

翠「え?」

状況が理解できない

ダ「もう一度言うわね…メランは桜井君とイカロスを殲滅するため  
に作られた子なのよ」

翠「どうして…そんなことのために…」

信じられない…

ダ「事の発端は私と彼のちよつとしたくいちがいなのよ…彼はダウナー、つまり人間の殲滅を目的としてエンジエロイドを作り、私は人間たちとの共存のために彼女たちを作ったのよ。ちなみに、アメリカとかの先進国にステルス機能や追尾型ミサイルの設計図とかを教えたのも私たちよ。」

何かさらりとすごいこと言ってるし…

ダ「でね。桜井君に贈ったイカロスは私と彼と一緒に作った最初で最後のエンジエロイドなのよ。イカロスは未完成だった。事もあるうに彼はイカロスにパンドラを積もうとした、それに気が付いた私はダイブゲームの応用で桜井君の夢に出てイカロスを送ることに成功した」

翠「そんなことがあつたんですか」

ダイタロスの言葉が重く感じてしまう

ダ「話を戻すとね。私は彼ら、桜井君達にシナプスの深層に近いものを教えてしまった…ねえ、イカロスに積んであるもの知ってるよね？」

翠「確か可変ウィングのコアでしたよね？」

ダ「そう。でも彼はそれを開発してしまった…でも彼はそこで壁に

ぶつかってしまったのよ…コアはあってもその分の出力に耐えられる外殻がなかったのよ、それで彼は考えた。考えた末にイカロスの外殻を利用した。それでできたのがメランなのよ」

ダイタロスから深層が教えられる。

翠「……………」

しばらくの沈黙。

翠「メランには殲滅の意思はもうないんでしょう？」

ダ「え？…ええ、そうよ。私がプログラムを直して今のメランがいるのよ」

翠「そうじゃあ大丈夫です。メランはメランですから」

笑顔で答える翠。

ダ「……………この話を聞いて後悔した？」

翠「とんでもない！むしろ彼女たちのことを聞けてうれしいですよ」

ダ「…当…」

声が途切れる

ダ「本当に…良いの…」

見ると涙を流しているダイタロスがいた。

翠「はい、彼女たちの事は任せてください。ですから、泣かないで下さいよ…僕が泣かしているみたいで罪悪感が半端ないんですけど…」

少し落ち込む翠であった…

ダ「その言葉を聞いて安心したわ」

次第にあたりが薄れていく…

翠「ちょー！」

消える瞬間何かを言った気がしたが翠には聞こえなかった…

ダ「ありがとうね」

……

「きら様……ですよ」

「翠様、朝……よ」

……ん……

誰か名前を呼ばれ体を起こす翠

翠「………」

現在の状況

布団 俺 馬乗り状態のイブ…

おかしくない？

(これは夢だ。夢に違いない！)

目を擦つても、今の現状は変わらない…

翠「頼むからイブ普通に起こしてくれない？」

イブ「？」

嫌々、そんな解らないみたいに小首傾げられても困るんですけど…

イブ「おはようございます。翠様」

翠「おはようイブ」

取り敢えずしぐさがかわいかったので頭を撫でてみる。

イブ「／／／」

気持ち良かったのか眼を細れるイブ…

翠「そういえば、メランは？」

イブ「食事の用意をしています」

撫でた手を離すと少し淋しそうにするイブ

翠「じゃあ、行くところか」

イブ「はい」

リビンググ…

翠「おはようメラン」

メラン「翠、おはようございます。」

昨日の夢の事を頭の片隅に置き食事をとる

メラン「どうですか？」

若干不安げに聞くメラン

翠「おいしいよー！」

（イカロスのスペックを考えれば予想はしていたけどこれほどはね）

イブ「私が作ったお味噌汁です」

翠「どれどれ…」

ズズ…

（二）、これは…ほのかに香る味噌の風味…『長いから割愛』

なんてことを考えていた

食事も済んで

メラン「あの…」

翠「どうしたの？」

メラン「私の…私たちのこと聞きましたよね…」

不安げに聞く

翠「聞いたけど…僕は関係ないと思うけど？」

メラン「な！怖くないのですか！ただ破壊するためだけに作られた私が！」

イブ「ちょっと…興奮しすぎ…」

メラン「う…すみません」

翠「怖くないよ？だってメランは優しくそうな顔しているし…てか物騒な事僕がさせないし…」

メラン「……」

翠の言葉を聞いて泣き出すメラン

メラン「私怖かったです。自分の過去を知っているの、それを聞いて翠が私を拒絶してしまうのでないかって…それで…それで」

あれこれデジャブじゃね？

ぽふ…

メラン「え？…」

何が起こったかわからないメラン

翠「大丈夫だよ。僕は前にマスターみたいに酷いことさせないし捨てたりもしないから、安心して」

優しく語りかけ、優しく頭を撫でる翠であった…

誕生の理由（後書き）

感想お待ちしています

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9577y/>

---

IS 二人の天使

2011年12月12日00時45分発行